

2022年 7 月 24 日 礼拝メッセージ

「放っておけない仲間」

牛田匡牧師

聖書 マルコによる福音書 8 章 22-26 節

先週から、私たちの教会では、大切な教会員とその家族の葬儀が行われました。新型コロナウイルス感染症の感染が急拡大している「第 7 波」の時期とも重なって、親族のみで行われましたが、それでも大切な家族とのお別れの時を通して、私たちは改めて、その方にかけてがえのない命を与えて、今日まで導いて来られた神様の豊かな働きを覚えました。またその方の生涯の間に、その方を通して新たに生まれて来られた命や、またその方と親しく交わりを持たせて頂いた思い出など、たくさんの恵みを頂いてきたことにも感謝でした。親しい方との地上でのお別れは、つらく、悲しいことですが、その命、魂は、死を超えられる神様の御許にあって、永遠の命を生きる者とされているということを見ると、ただ悲しいだけではなく、命の神の大きな御手の中に包まれているような安心感もまた、感じられるのではないかと思います。

身近なところでは、そのようなことがありましたが、その一方で、日本社会全体に目を向けますと、ますます息苦しさや生きづらさは増して来ているように思います。生きていること自体に希望が持てないから、「刑務所に入りたかった」「誰でも良かった」などという理由で、引き起こされる通り魔事件や放火事件などが、近年、増えて来ているように感じます。先日の安倍晋三元首相の襲撃、殺人事件の容疑者もそうでしたが、犯行に及ぶのは私と同じ 40 代前後の年代の人が多いようです。いわゆる「ロストジェネレーション」平成の「失われた 30 年」間に成人した人たちです。

その 30 年間に、日本経済は世界経済の中で後れを取り、低迷し続け、新しい製品や技術を開発して外に売り込みに行くのではなく、自分たちの内側を叩いて無理強いしてきました。分かりやすいのが、労働者の雇用形態ですが、正規雇用の労働者を次々減らして、非正規雇用をどんどん増やしてきました。その結果、今では労働者の 35%以上が不安定な非正規雇用となりました。年間の所得、年収の格差も開き続けていますが、総じて皆が貧しくなっています。平均年収自体も下が

り続けていますが、極端に多い人と少ない人との格差があるために、平均年収は400万円超と高目になっています。しかし、実際には年収400万円以下の人が、全労働者の約6割(55%以上)です。年収300万円以下の人は約4割(38%) (国税庁「R2民間給与実態調査」)。「経済白書」でも、内閣府の調査でも明らかにされていますが、世帯年収500万円以下の世帯では子どものいる率がぐんと下がり、年収300万円以下だと、そもそも結婚自体ができていないのが現状です。国の政策として「少子高齢化」に対応する、というのであれば、どこに手当てすべきかを考え直す必要があるように思えてなりません。

「無敵の人」という言葉を、聞いたことがあるでしょうか。先日の安倍元首相の襲撃事件以降、再び注目されているようですが、インターネット上でのネットスラングとして、「家族もなく仕事も財産もなく、守るべきもの、失ったら困るものが何も無いから、何も怖いものがない。だからテロでも通り魔でも何でもできる人」のことを、「無敵の人」と呼ぶのだそうです。利権を握った極一部の大企業、お金持ちの人たちだけを優遇してきた政策の末が、たくさんの自暴自棄に走る「無敵の人」を生み出してしまったというのは、とても恐ろしいことです。今、自民党は必死に安倍元首相を国葬にしようとしています。民意を無視した決定には、第二第三のテロ行為が引き起こされるのではないかと心配します。

今日も明日も安心して働ける仕事があり、食べる物と休める所があり、結婚した夫婦の関係に限らなくてもいいと思いますが、お互いの存在を「大切だ」と言い合える仲間、家族や友人がいて、多少なりとも将来の夢を思い浮かべられるようであれば、人は誰も自暴自棄にはならず済む。「無敵の人」は登場しなくて済むのではないかと思います。このような考え方は、「平和ボケ」した「お花畑」的な思考でしょうか。

今回の聖書のお話は、ベトサイダの町で目の見えなかった人の視力を回復させたという奇跡物語でした。場所はガリラヤ湖の北東の岸の町です。「ベトサイダ」というのはヘブライ語で「漁師の家」という意味ですから、湖畔の町として古くから漁業が盛んだったのでしょう。どれくらいの人口があったのかは分かりませんが、ナザレなどの農村よりは大きかったのではないかと想像します。ベトサイダの町に到着したイエス様と弟子たち一行の所に、人々が一人の目の見えない人を連れ

できました。イエス様に「触れて頂きたい」と願ったそうです。ここで「触れて」と訳されている言葉(ハプター)は、「しっかりつかむ、抱きつく、ハグする」という意味も持っている言葉です。これまでもイエス様の所に来て、その衣の端であっても、ギュッと握りしめた女性(マルコ 5:26)を始めとして、何人もの人々が、イエス様にしっかりとつながりたい、と願ってその傍にやってきました。

病気の人、障がいを持っている人など、それらの人々は、律法に違反する、宗教的に穢れているので、関わってはいけない。そのような人に近づいたり、接触したりすると、自分にも穢れが伝染して、自分も穢れてしまう。だから、むしろそのような人たちを避けることが、自分自身の身を清く保つことであり、律法的に神の前に義しいことだと考えられていた時代です。それが社会常識だった時代に、イエス様は自分の所に来られた人たちを拒むことなく、自分の方からも触れられました。ここでは目の見えない人の両目に、「唾をつけて、両手をその人の上に置いた」(8:23)とあります。この少し前の7章では、耳が聞こえず、口の利けない人が連れて来られた時には、同じように「その指を両耳に差し入れ、唾をつけてその舌に触れられた」(7:33)とありました。

そしてそれによって、この目の見えない人は視力が回復して目が見えるようになり、耳が聞こえず口が利けなかった人は、聞こえるようになり話せるようになりました。これらの唾をつけて、指を差し込むなどの具体的な行為が、歴史的事実であったかどうかは分かりません。イエス様の癒しの奇跡物語が、人々の口から口へと語り継がれていく中で、話が聞きやすいように、話に背びれ尾ひれとして付いていたのかもしれませんが。ですが、大切なことは、イエス様の所に連れて来られた人を、イエス様が拒まず、自らが穢れることを顧みずにその相手に触れ、いわばその穢れを共有することを通して、神の力が働いた、癒しの業が働いた、ということですね。それは言うなれば、その相手の存在そのものを、そのまま、ありのまま受け止め、つながった。そこに真の癒しがあった、ということではないでしょうか。

この「目の見えない人が見えるようになった話」というのは、物理的、医学的な視力の回復のお話なのではないでしょうか。もしもそうなら、イエス様以降の2000年間、イエス様に従うという教会は何もできていないことになってしまいます。むしろこのお話は、共同体からつまはじきにされて「生きる場所」を持っていなかった人が、新しい生きる場所、新しい共同体を見つけて、そこで文字通り新しく生きられるように

なった、というお話のように思います。彼がそのようになれたのは、彼のことを「放っておけない仲間」として、親身になってイエス様の所まで連れてきてくれた人たちがいたからです。そしてイエス様自身も、臆せずにその人にしっかりと触れられたからです。彼の「穢れ」と呼ばれるものを共有したのは、何もイエス様だけではなく、彼をイエス様の下に連れてきた仲間たちもまた、そうでした。7章に登場する「耳が聞こえず、口の利けない人」も、周囲の人々によってイエス様の前に連れて来られました。2章に登場する「体の麻痺した人」は、4人の仲間によって、イエス様の前に天井から吊り降ろされました(2:1-5)。

私たちにとっての「放っておけない仲間」や「家族」とは、どこの誰でしょうか。私たち自身の歩みを振り返ってみた時、多くの方々にその時その時に助けられ、支えられて来た、ということをおぼえられるのではないかと思います。いわば「放っておけない仲間」「かけがえのない友達」「家族」として、大切にされた経験があるからこそ、今があるのではないのでしょうか。

「無敵の人」……。誰も好んで「無敵の人」になりたい人はいないはずですが、皆それぞれに、それぞれの時と場所で、「SOS」を発信していたはずですが、けれども、誰もその人のことを「放っておけない仲間」としては見つけられなかった。またその人自身も、周囲の人々とのつながりを思い出すことができなかつたのだらうと思います。奪われていい命、また奪わせてしまっている命は、存在しません。お互いに顔の見える関係、名前を呼び合い、知り合っている関係性、大切な友達、仲間、家族のような関係性が出来ていて初めて、私たちは自分の命も人の命も、安心して大事にできるのではないかと思います。

私たちは、今日もこの後、ささやかな取り組みではありますが、おにぎりを作って、西成の釜ヶ崎にお届けさせていただきます。「仕事が出来なくなって、収入がなくなって、食べる物がなくなったのは、自己責任」。だから「自分とは関係がない」と言っていたら、そこには何の関係性も生まれません。私たちにできることはわずかですが、イエス様の言葉とふるまいに従って、「放っておけない仲間」の関係を、少しずつでも広げていきたいと願っています。